向日市観光まちづくりへの提案

令和元年度 近畿観光まちづくりコンサルティング事業

2020年3月

近畿観光まちづくりアドバイザリー会議

はじめに

近畿観光まちづくりアドバイザリー会議では今年度、重点支援地域として京都府向日市を選定し、現地視察や会議を通じて、向日市への観光客誘致や旅行商品化などへつながる観光まちづくりの方向性を検討してまいりました。

現地視察では、竹の径をはじめ物集女車塚古墳や西国街道、向日神社、長岡宮跡といった歴史文化資源のほか、民間主導でユニークな取り組みを進める京都向日市激辛商店街などを見学しました。それぞれは個々に光を放つ資源であると評価できますが、観光という観点で向日市全体を俯瞰した場合にイメージを描きづらいというのは否めません。

反面、京都市から至近距離にある立地であり、市長をはじめ行政の皆さんの熱意も感じました。激辛商店街は民間の皆さんで進められていることにも関心を持ちました。竹の径は市民以上に、市外の人たちの注目を集めており、大いなる可能性も見い出したところです。

そこで私たちは、向日市観光の拠点、観光交流センターのオープンを目前に控えた今、向日市の観光まちづくりのベクトル案をお示しすることに重きを置くべきではないかと考えました。それは官民協働で掲げる旗印、向日市ブランドにほかなりません。そのブランディングは、オーバーツーリズムに悩む京都市に隣接する地の利を生かしながら、観光地としての価値を創出することであると考えるに至りました。

そこで、個々の観光資源の点としてではなく向日市として認知してもらう、その方策を「径」というキーワードでお示ししました。

委員の知見をまとめた本提案書が向日市の観光まちづくりを推進する一助になり、日本を代表する観光地のすぐ脇でキラリと光る向日市につながっていくことを願ってやみません。

近畿観光まちづくりアドバイザリー会議　一同

1. 現地視察報告

（1）地域資源の評価ー1

視察した地域資源について、観光資源としてなりうる可能性、旅行商品化に対応できるか否かを評価し星数によって表しました（３つ＝歓喜！、２つ＝可能性大、１つ＝条件付で可能性あり、ゼロ＝可能性なし）。以下のポイントは、委員の星数の総和を視察した人数で割り算出しました

①竹の径　　2.29ポイント＝視察資源で最高ポイント

プラス点＝「景観・雰囲気がいい」「SNS映えする」「訪日客にも受ける」

マイナス点＝「休憩ポイントが少ない」「車の通行量が多い」「蚊が多い」

⇒観光インフラの整備　休憩スポットやガイドなど受入整備　特別感の演出

②物集女車塚古墳　　1.23ポイント

プラス点＝「石室の内部を見られる」「古墳マニア向け」

マイナス点＝「アクセス／受入整備」「観光資源ではなく学術的」

⇒有料・名物ガイドの充実　受入インフラ整備　公開日の拡充　価値の創出

③大極殿御膳　　1.29ポイント

プラス点＝宮殿料理を再現した「ユニークさ」「味」

マイナス点＝「値付け／値ごろ感」、料理を説明する「うんちく」

⇒付加価値の創出　値付け

1．現地視察報告

（１）地域資源の評価ー２

④西国街道　　1.07ポイント（最低値）

プラス点＝「古民家活用」「街道の知名度」

マイナス点＝「まち歩きの雰囲気」

⇒歩きたくなるコンテンツ開発　環境整備　他資源との連携

⑤向日神社　　1.64ポイント

プラス点＝「境内、参道の雰囲気」「ガイド」「再訪する価値」

マイナス点＝「知名度」

⇒参拝の動機づくり　春・秋だけでなくイベントや仕掛けによる平準化　環境整備

⑥長岡宮跡　　1.71ポイント

プラス点＝「ＡＲ・ＶＲによる見える化」「マニア向け」

マイナス点＝「環境」「ＰＲ不足」「再現性」

⇒イベントや仕掛けづくり　集客戦略の策定　他の古代宮との連携

⑦京都向日市激辛商店街　　1.21ポイント

プラス点＝「話題性」

マイナス点＝「事前期待とのギャップ」「辛い物が苦手」

⇒辛さのランク付け　仕掛けづくり　メニュー充実による多様性

1. 現地視察報告

（2）（仮称）観光交流センターについて

市民同士、市民と観光客、観光客同士が交流する拠点とするために

【センターへの誘導】
- 向日町駅からの動線
- 施設名称の検討
- 観光拠点としての周知

【センターの機能】
- まち歩きの拠点化
- レンタサイクル事業
- 飲食物販機能
- 体験予約のプラットホーム
- コンシェルジュ等の案内人の常駐

【センターの魅力づくり】
- 竹にこだわった内外装
- 地域アンテナショップ

京都西山エリアの拠点

京都西山エリアの住民が集い、情報が集まる観光交流センターから始まる京都西山の旅

担い手となる民間とともにつくる交流拠点

1. 現地視察報告

（3）新市庁舎「（仮称）トップ・オブ・向日」について

市民が主役で観光客も利用できる拠点とするために

【眺望を生かす】
- 歴史の舞台を俯瞰
- 競輪場
- 京都市街

【仕掛けづくり】
- 昼夜を問わず営業
- 竹による空間演出
- ライブやイベント

【メニュープランの検討】
- 宮廷料理の再現
- 激辛メニュー
- 地元食材（京野菜など）の活用
- 専門店化(イタリアンなどのﾒﾆｭｰ特化)
- 筍＋魅了する食材

宮廷料理

イタリアン

京野菜のブッフェ料理

市民も市職員も集い、寄り径観光来訪者も”同じ釜のめし“

食による集客交流拠点

1．現地視察報告

（4）向日市全体の評価

多くの委員が向日市の「プラス点」として京都市内からのアクセス、竹の径、まちがコンパクトであることを評価しました。また、激辛商店街や長岡宮跡といった他にない資源、市長をはじめ熱意があることもプラス点で、人口が増加傾向にあり次世代を担う子どもの数が多いことに期待を抱きました。

一方で、観光消費につながる素材や資源の乏しさ、車の通行が多く道路の歩きにくさ、市内回遊性の欠如、知名度の低さを「マイナス点」として指摘する委員も多く、予想以上に評価が低い印象でした。

プラス点（強み）

☆京都市内からアクセス　☆竹の径
☆コンパクトさ
☆他に類の無い「激辛商店街」の存在

マイナス点（課題）

☆観光消費につながる素材や資源の乏しさ
☆市内回遊性の欠如　☆知名度の低さ
☆駐車場・トイレ等ハード整備不足　☆車の通行量

「プラス点」をさらに伸ばし、「マイナス点」の洗い出しと改善策の検討

アクセス　京都市内から至近距離の利点を生かすターゲット設定
竹の径　観光交流センターと連動し観光消費を促す商品開発
コンパクトさ　レンタサイクルなどによる市内回遊性の向上

【向日市観光まちづくりの突破口】

★竹を生かしたブランディング　★長岡宮跡など歴史資源の活用　★子ども参画の観光まちづくり

〝向日市型〞観光まちづくりの実現

2. 観光まちづくり突破口の考察

（1）竹を活かしたブランディング

「竹の径」は、委員の評価がもっとも高く、旅行情報誌じゃらんの「行ってみたい新緑絶景ランキング」で全国1位に選出されたほか、国土交通省「手づくり郷土賞」や日本ウオーキング協会「全国歩きたくなるみち500選」に選ばれるなど、向日市観光の”顔“となる唯一無二の資源です。コマーシャルのロケ地として選ばれるなど知名度も上がりつつあります。この竹の径を核にして、向日市の観光まちづくりをデザインしていくことは、合理的かつ効果的だと考えます。

竹の径は2012年以降、行政主導で整備が進められてきました。市民、民間が参画し竹の径を生かす仕組みをつくり、観光まちづくりの旗印として向日市ブランドを醸成する資源として活用していくべきでしょう。

「竹の径」推し

↓

行政による竹垣整備

↓

公設民営で観光消費促進

車通行禁止時間帯の設定など”歩きやすい径“に

↓

竹づくし

↓

「竹の径」を核に向日市観光まちづくり

- 京都市至近の観光スポットとしてＰＲ
- 竹の径までのアクセスの工夫と演出
- ＪＲ西日本、阪急電車、京都市内の旅館ホテルにアピール
- 京都市と連携し、洛西竹林公園の運営参画
- 時間消費と観光消費を促すコンテンツ（有料のブラタモリ型ガイド、劇場）開発
- 観光交流センター等の竹の設え
- 激辛商店街「爆竹」メニュー等タケづくし料理の開発
- イベント等での活用

2. 観光まちづくり突破口の考察

（1）竹を活かしたブランディング

竹づくし

流しそうめん、バンブーダンス、竹（ちく）リンピック、竹チップ舗装…

竹にこだわった竹づくしで、竹をコンテンツ化

2. 観光まちづくり突破口の考察

（2）長岡宮跡など歴史資源の活用

長岡宮跡、物集女車塚古墳、向日神社、西国街道など歴史資源が豊富な向日市ですが、観光の観点からは活かしているとは言えません。それぞれを単体で売り込むのではなく、歴史のまち向日市や「東山」に対する「京都西山エリア」として資源をつなぎアピールしていくことが肝要だと考えます

歴史資源をめぐる回遊性を高めるため、それぞれ時代や歴史上の人物などに応じた「○○の径」などのネーミングを考えてみてはどうでしょうか。前項・竹の径との統一感も生じさせることができます

歴史の見える化、史実からストーリーを生む

↓

京都市至近の歴史舞台

京都市に来訪する学習旅行需要を呼び込む

ＶＲ、ＡＲを活かす

↓

幻の都

平城京と平安京の間に置かれた都。「遷都の径」で奈良、向日市、京都を結ぶ

↓

径をつくる

季節限定、向日神社、「桜の径」、京都市西京区や長岡京市の西山エリアの古墳、歴史資源をつなぐ「西山の辺の径」などルート化

↓

歴史資源を現代の資産にマネタイズ

2. 観光まちづくり突破口の考察

（3）子ども参画の観光まちづくり

向日市が掲げているテーマ「子どもたちが自慢できる観光まちづくり～行ってみたい、住んでみたいふるさと向日市」は、観光まちづくりを一過性ではなく継続的に進展させるうえで欠かすことのできない視座です。

そのためにも、子どもたちはもちろん、大人も楽しめ、向日市に来る人を笑顔にする観光まちづくりにしなければならいと考えています。大掛かりでなくても、老若男女が参加し楽しむことで、結果的に持続可能な観光まちづくりにつながっていく取り組みが大切だと考えました

持続的に発展する観光まちづくりへ

↓

楽しむまちづくり

竹の径での竹（ちく）リンピック

筍料理レシピのコンクール、爆竹筍、給食

↓

生涯演出のまちづくり

竹の径デート → 竹林で婚前写真撮影 → 向日神社で結婚式とお宮参り、七五三 → 結婚披露宴はトップ・オブ・向日…

↓

手仕事まちづくり

竹垣や犬矢来、マイ竹水筒・竹箸、竹縁台

昔遊び、放置竹林の冒険竹林（遊び場）づくり

↓

市民が参加しやすい観光まちづくりの実現

3. 観光まちづくりの戦略と戦術

（1）誰に来てもらうのか（来てもらいたいのか）

歴史資源を生かした突破口で、京都市を訪れている修学旅行生を呼び込む歴史学習の地としてのアピールを指摘しました。これは歴史観光に限らず、向日市観光全般に当てはまることです。わざわざ遠くから向日市に来てもらうよう情報を発信しＰＲするのは大変な労力、金銭が伴いますが、すでに国内外から多くの観光客が京都市を訪れていることに着目し、その中から向日市として来てほしい観光客を選別、集客することに注力した方が即効性があります。例えば、歴史に興味があり散策したい中高年、激辛商店街を活用した若者やカップル、女性をターゲットとするなど具体像を描いた取り組みを進めたいところです。

ＪＲ京都線　向日町駅（京都駅から７分）　　阪急電鉄　東向日駅（河原町駅から11分）　西向日駅（同13分）

京都市内の喧騒からエスケープ
京都西山エリアのゲートウェイ

観光交流センターでお出迎え

【想定される観光客像】
・何度も京都市へ来訪
・嵯峨野ではない竹の径を求めて
・歴史に好奇心を持ち散策好き
・大混雑に辟易

【想定される受け入れ態勢】
・京都市と異なる価値の提供
・素朴な竹の径の楽しみ提案
・のんびり移動（回遊）
・ゆったり食事、激辛グルメ

京都市内から少し足を延ばして大人も楽しめる**”寄り径“観光**

3. 観光まちづくりの戦略と戦術

（2）戦術としての寄り径観光　その１

向日市は目的地ではなく、国内でも最大の旅行目的地である京都市に付随した「寄り径」観光地としてのポジションを確立すべきだと考えます。現状の資源を生かしながら、そこにプラスアルファを付加することで、寄り径にピッタリな観光まちづくりを目的地との対比から考えてみましょう

【目的地・京都市】

項目	事柄
旅行形態	宿泊滞在地
食	三ツ星クラスの懐石料理
資源	世界遺産など一級品
お土産	豪華多彩
観光メニュー	豊富
移動	市バス、タクシー、レンタル
観光消費額	大

【寄り径・向日市】

項目	事柄
旅行形態	寄り径観光地
食	激辛、大極殿御膳
資源	竹の径、激辛商店街、歴史等
お土産	特になし
観光メニュー	ガイド、ＶＲ・ＡＲ体験
移動	徒歩
観光消費額	ごくわずか

寄り径して観光するには選択肢が少なすぎる！

3. 観光まちづくりの戦略と戦術

（2）戦術としての寄り径観光　その２

仮に戦術として寄り径観光を指向した場合、寄り径の楽しさ「意外性」を担保する選択肢がたいへん少ないと言わざるを得ません。そこでポイントとなるのが、これまでお示しした観光まちづくりの突破口です。特に、観光交流センターの開設を絶好の機会と捉え、向日市（京都西山）寄り径観光の確立に向けた仮説を立ててみました。新たな取り組みや工夫による成果を見込み、具体的な観光消費額を目標に掲げることで、取り組むべき内容や方向にしっかりと向き合えると考えられます。

【寄り径・向日市／京都西山エリア（将来像）】

項目	事柄
旅行形態	寄り径観光地
食	激辛、大極殿御膳（宮廷料理の再現）、筍の主菜副菜としての利用拡大（女性向けヘルシーメニュー）、「（仮称）トップ・オブ・向日」
資源	竹の径、激辛商店街、歴史資源、桜の径、遷都の径、西山の辺の径、ロケの径等
お土産	竹製品を中心とした工芸品、地元野菜や京野菜、激辛系お菓子・グッズ、スイーツ
観光メニュー	ガイド、ＶＲ・ＡＲ体験、タケノコ堀り、竹細工づくり、竹馬さんぽ
移動	徒歩、電動アシスト自転車（ガイド付き可）
拠点	観光交流センターを核にサテライト型の寄り径休憩スポット、貸切バス待機所

時間とお金を消費できる寄り径観光地

3. 観光まちづくりの戦略と戦術

（3）担い手（プレーヤー）の育成

向日市ではすでに、民間主体で激辛商店街という先進的な事例があります。激辛商店街の皆さんの生業とまちづくりのベクトルが一致し、全国に比類のない取り組みが進展しました。もともと、そうした素地があり、その上で前項の子ども参画の観光まちづくりを大人も巻き込みながら進めるとともに、近隣の大学生など地域づくりに関心のある若年層にも門戸を開き、大儲けはできないが生業として観光まちづくりの可能性を示し担い手の輪を広げていきたいものです。

1st．公設民営

むこう観光
スタートアップ講座

観光交流センターの運営
(仮称)トップ･オブ･向日の活用

観光まちづくり戦略の立案
子ども参画の仕組みづくり

2nd．自立運営

エリアデザイン

自走できる収益

むこう観光
ワークショップ
（京都西山エリア
マネジメント・
マーケティング）

多様な関係者の巻き込み
(商工会議所等)
新たなプレーヤーとして、地元（竹・野菜など）生産者や激辛商店街メンバーとの連携

3rd．持続可能

むこう版
ＤＭＯの設立

観光まちづくりマネタイズ
京都西山エリアのマネジメント

アドバイザリー会議

観光まちづくり戦略
アドバイス

寄り径プラン
旅行商品化助言・協力

エリアマーケティング
助言・協力

営利事業エリアの確立

事業としての持続可能性

観光事業の
出口戦略

行ってみたい、住んでみたい 向日市ブランドの確立

3. 観光まちづくりの戦略と戦術

（4）観光まちづくりの出口戦略を考える

観光まちづくりを持続的に発展させていく上で、「むこう版DMO」を概ね3年を目途に設立したいものです。その際、特に考えなければならないのは「出口戦略」です。会議の中でも、委員の中から「一般的に行政はパンフレットを作れば満足する傾向がある」という指摘がありました。これは、作ることが目的化してしまい、本来の目的であるはずの情報発信先、集客へつなげるという視点を欠いているというものです。「住んでみたい、行ってみたい」向日市を目指すために、観光まちづくりの出口戦略は不可欠です。

出口戦略に長けた民間事業者（旅行会社）と連携するメリットがここにあります。会議における委員の発言から出口戦略のヒントを示しました。

データ取得・分析	観光マーケティングの第一歩	例）ニーズの把握とターゲットの絞り込み
プレーヤー発掘	ハードルを下げる	例）農産物の規格外品を加工することによって活用する＝農商工連携へつなげる
情報発信	発信先を明確化 エリア内発信の連携	例）京都市街からの近さ「京都西山」として、旅行会社、京都の旅館ホテルに周知
交流センター	賑わいをつくる	例）市民（周辺住民）が集う拠点とすることを第一に考える
マネタイズ	地域循環の徹底	例）観光まちづくりの事業化によって得られた収益を観光客が快適に過ごすことができる環境整備に充て、住環境向上にもつなげる

4. 向日市型観光まちづくり～おわりに

「市民よし、観光客よし、地域よし」につながる寄り径観光の実践

世界クラスの京都市に隣接する向日市ならではの観光まちづくりとは何か―。

私たちは現地視察、会議を通じてこの問いに答えを見い出そうと試みてきました。半年余りの短い時間の中で、その答えを出すことはたいへんおこがましいことであり、簡単なことではありません。

それでも、観光地としての知名度が低く宿泊施設がない向日市を目的地とするのは厳しいという共通認識のもと、向日市型観光まちづくりの考察を重ねてきました。

このまちの最大の利点は京都市から至近距離にあることです。その上で、竹の径や長岡宮跡、向日神社、激辛商店街など光を放つ資源を有しています。その資源を活用し、市域全体の観光まちづくりに昇華するためには「径」をキーワードにした寄り径観光に可能性を見い出すことでした。ＪＲや阪急をわざわざ途中下車する、あるいは貸切バスで少し立ち寄ってみる、そんな観点から向日市の観光まちづくりの方向性をお示ししようとしたのです。

京都市が今オーバーツーリズムの課題に悩む中で、ごく近くには嵯峨野の竹林を上回る佇まいを有する美しい竹の径があり、長い歴史を有する資産、類例のない激辛なグルメがあります。このまちは、もっと多くの担い手によって埋もれた資源を掘り起せばさらに輝きを増すはずです。そして、向日市を拠点とした「京都西山エリア」という広域な視点を含めて、観光まちづくりの仮説を立てることにしました。

観光客や旅行会社という外の人の視点を活かしながら、市民と行政が協働して向日市独自の観光スタイルとして「寄り径観光」を実現することが、向日市の観光まちづくりの方向性ではないでしょうか。

地道に積み上げたその結果が市民よし、観光客よし、地域よしにつながっていくと考えています。

本提案書が今後の観光まちづくり進展のきっかけの一つとなれば幸いです。

近畿観光まちづくりアドバイザリー会議　一同